富山県 婦中町

友坂遺跡　発掘調査報告Ⅲ

１９９７年3月

婦中町教育委員会

序

婦中町朝日地区は、古代の人々の生活痕跡が多く残される地域で、友坂遺跡はこの地区の中央部に位置しています。

今回、婦中町教育委員会では、当遺跡において個人住宅建築に先立つ発掘調査を実施致しました。調査では古代及び中・近世の遺物が数多く発見されるとともに、古代の土器の廃棄場所や鍛冶関連の遺構等の他、地震による墳砂も確認されました。このような遺跡は、先人の暮らしやそれを取り巻く自然環境の一端が窺えるものであり、郷土の歴史を知らしめる大切な文化遺産であります。

ここにまとめました報告書は、文化財に対し一層ご理解をいただくための資料としてご活用頂ければ幸いと存じております。

最後に、調査にご協力、ご指導頂きました地権者の方、関係者のみなさまに心から感謝を申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い致しましてあいさつといたします。

平成9年3月

婦中町教育委員会

教育長　清水　信義

例　言

1　本書は、富山県婦負郡婦中町友坂・下条地内に所在する友坂遺跡の埋蔵文化財調査報告である。
2　調査期間・面積は次の通りである。
　調査期間　平成８年５月20日～平成８年７月22日（延べ39日間）
　調査面積　340㎡（Ａ地区260㎡、Ｂ地区80㎡）
3　調査体制は以下の通りである。
　調査担当者　婦中町教育委員会　生涯学習課　文化財保護主事　片岡英子
　　文化財保護主事　堀内大介
　調査事務局　婦中町教育委員会　生涯学習課　課　長　鍋山　徹
　　文化振興係長　山田茂信
　作業員の確保については、婦中町シルバー人材センターの協力を得た。
4　資料の整理、本書の編集と執筆は、調査担当者がこれに当たった。
5　資料整理期間中、高梨清志氏から御教示・御協力を頂いた。記して謝意を表したい。
6　本書の挿図・写真図版の表示は次の通りである。
　方位は真北、水平基準は海抜高である。
　遺構の表記は次の記号を用いた。井戸：ＳＥ、溝：ＳＤ、土坑：ＳＫ、ピット：ＳＰ、不明遺構：ＳＸ
7　出土品及び記録資料は婦中町教育委員会が保管している。
8　整理作業参加者は次の通りである。
　中坪千春・生田寿美子（整理作業員）
　河西英津子・海道雅子・本村徹・藤田良子・栃谷朋子・鈴木由紀・戸簾暢宏・貫井美鈴・野水晃子・半井晶子・深田亜紀・工藤直子・小松博幸・小野基・滝沢匡・小島あずさ・匂坂友秋（整理補助員）

本文目次

序　文
例　言
目　次
Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 1
Ⅱ　調査の経緯と経過 …… 2
　1　調査に至る経緯 …… 2
　2　調査の経過と方法 …… 2
　3　座標軸の設定 …… 2
Ⅲ　調査の概要 …… 4
　1　Ａ地区 …… 4
　(1)　概況と層序 …… 4
　(2)　遺構 …… 4
　(3)　遺物 …… 5
　①出土遺物の概要 …… 5
　②Ａ地区遺構別出土遺物 …… 7
　2　Ｂ地区 …… 18
　(1)　概況と層序 …… 18
　(2)　遺構 …… 18
　(3)　遺物 …… 19
Ⅳ　まとめ …… 28
　1　遺構 …… 28
　2　遺物 …… 29
　3　友坂遺跡第７次調査区について … 29
参考文献
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　周辺の遺跡分布図及び一覧
第２図　調査対象範囲と区割り図
第３図　Ａ地区層序模式図
第４図　出土遺物一覧
第５図　Ａ地区遺構配置図及び遺構断面図
第６図　Ａ地区遺構平面図・断面図
第７図　Ａ地区遺構平面図・断面図
第８図　Ａ地区遺構平面図・断面図
第９図　Ａ地区出土遺物実測図
第10図　Ａ地区出土遺物実測図
第11図　Ａ地区出土遺物実測図
第12図　Ａ地区出土遺物実測図
第13図　Ａ地区出土遺物実測図
第14図　Ｂ地区層序模式図
第15図　Ｂ地区遺構配置図
第16図　Ｂ地区遺構平面図・断面図
第17図　Ｂ地区出土遺物実測図
第18図　Ｂ地区出土遺物実測図
第19図　Ｂ地区出土遺物実測図
第20図　Ｂ地区出土遺物実測図
第21図　Ｂ地区出土遺物実測図
第22図　Ｂ地区出土遺物実測図
第23図　周辺の地籍図

Ⅰ　遺跡の位置と環境

婦中町は富山県の中央部に位置する。町の地形は、概ね西側の丘陵部と東側の平野部に二分される。丘陵部は県中央部に南北に走る呉羽丘陵の南方に連なり、山田川によって二分されている。一方、平野部は神通川とその支流の井田川が形成した扇状地が広がり、富山平野へと続いている。本書で報告する友坂遺跡は、富山県婦負郡婦中町友坂・下条地内に所在し、呉羽丘陵南西端の杉谷丘陵から東に約400m、井田川から西に約700mの位置に広がる。

ほ場整備前の地籍図を観察すると、友坂地区には旧河道の名残と思われる田の区劃が見受けられ、旧河川の右岸微高地に木遺跡が、左岸微高地に友坂天神遺跡が形成されていた事が窺える（第23図参照）。友坂天神遺跡は現在のところ範囲が不明確であるが、地籍図から考えると、南方の友坂金城坊遺跡と繋がる可能性がある。両遺跡ともに古代に帰属し、一帯には古代の一大集落が形成されていたと考えられる。

遺跡西方の丘陵地は、県内有数の遺跡密集地帯であり、各時代の遺跡が数多く存在する。そのうち周辺に所在するものを挙げると、四隅突出型墳丘墓や古墳がある杉谷古墳群、縄文時代を中心時期とする総野Ⅰ～Ⅵ遺跡、古代・中世の小長沢Ⅰ遺跡などがある。一方、東方の平野部には、井田川の左岸に中世の平城である安田城跡があり、右岸には西木郷遺跡がある。南方の平野部については未踏査の為、遺跡の分布状況は不明である。　（片岡）

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	友坂遺跡	縄文・古代・中世・近世	6	総野Ⅰ遺跡	不明
2	友坂天神遺跡	縄文・古代	7	総野Ⅱ遺跡	縄文
3	友坂金城坊遺跡	古代？	8	総野Ⅲ遺跡	縄文・古墳
4	杉谷古墳群	縄文・弥生・古墳	9	総野Ⅳ遺跡	縄文
10	小長沢北塚	不明
11	小長沢Ⅰ遺跡	古代・中世
12	安田城跡	中世・近世
13	西本郷遺跡	中世
14	宮ケ島Ⅰ遺跡	中世・近世

第1図　周辺の遺跡分布図及び一覧（1／20,000）

Ⅱ　調査の経緯と経過

1　調査に至る経緯

友坂遺跡は、今回を含め９次にわたって試掘調査や本調査が行われている。

今回の調査地については、平成７年に個人住宅建設に伴い、農業振興地域整備計画除外申請が提出され、これを受けて婦中町教育委員会では申請地が友坂遺跡の近隣地であることを考慮して、申請地及びその周辺の現地確認調査を行った。その結果、多量の遺物が採集され、友坂遺跡の範囲がこの地域まで拡がると推定された。その為、事前調査が必要である旨を申請者に通知し、平成７年11月、Ａ地区519㎡の試掘調査を行った。調査の結果、柱穴・土坑等の遺構が検出され、須恵器・土師器・瀬戸等が出土した。申請地に友坂遺跡の遺存を確認したため、申請者との協議の結果、建物部分260㎡について平成８年５月本調査を行うこととなった。Ｂ地区については、申請者との協議の結果、建物部分80㎡についてＡ地区と同時期に本調査を行うこととなった。

尚、友坂遺跡で過去に行われた調査は下記の通りである。

第１次～第４次調査　昭和56・57年、平成３・４年にわたって、町立朝日小学校の校舎改築・体育館改築・ランチルーム建設等や町立朝日保育園建設に伴い、約4,300㎡の試掘調査を行い、その内約2570㎡を本調査した。その結果、古代の竪穴住居・溝・石敷き遺構等、中世の掘立柱建物・柵・溝・井戸・土坑等の遺構を検出し、須恵器・古代土師器・中世土師器・珠洲・青磁・瀬戸美濃・越中瀬戸・漆器等が出土した。４次にわたる調査から、この調査区域に古代集落と中世城館が存在していたことが確認された。

第５次調査　Ａ地区の試掘調査に当たる。平成７年11月に519㎡を対象に試掘調査を行った結果、柱穴・土坑等を検出し、須恵器・土師器・瀬戸等が出土した。

第６次調査　平成８年４月に町道上友坂小学校線道路拡幅工事に先立ち、235㎡を対象に試掘調査を行った結果、中世の溝を検出し、須恵器・古代土師器・中世土師器・珠洲・瀬戸美濃等が出土した。

第７次調査　今回の調査に当たる。

第８次調査　平成８年８月にゲートボール場造成工事及び農道アスファルト舗装工事に先立ち、町立朝日小学校の学校農園及び農道の3,100㎡を対象に試掘調査を行った。その結果、ゲートボール場造成工事計画地では事業計画面積1,200㎡に中世の遺構が遺存することが確認され、農道舗装工事計画地では事業計画面積1,900㎡のうち約280㎡に古代・中世の遺構が遺存していることが確認された。農道舗装工事については計画の変更がしがたいため、遺構の遺存していた約280㎡の記録保存調査を急遽実施する事となった。その結果、古代の竪穴住居２棟・溝・石敷き遺構等、中世の溝・土坑等の遺構を検出し、須恵器・古代土師器・中世土師器・珠洲・瀬戸等が出土した。

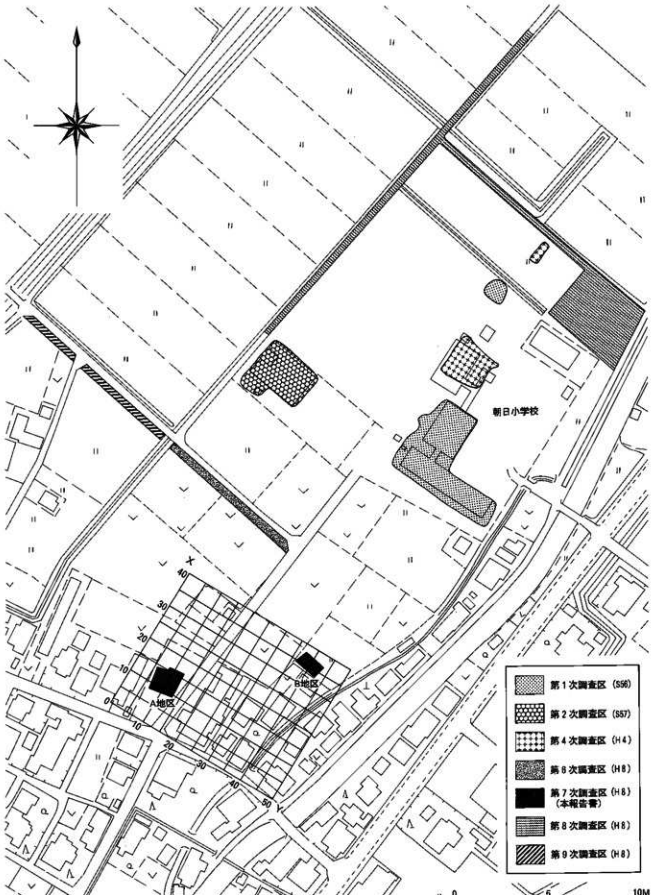
第９次調査　第６次調査の西側延長部分の工事に先立ち、136㎡を対象に試掘調査を行った。調査の結果、遺跡の広がりが確認されたため、記録保存調査を急遽実施する事となった。その結果、中世の木組み井戸２基・溝・土坑等の遺構を検出し、須恵器・古代土師器・珠洲・青磁・箸・砥石等が出土した。

2　調査の経過と方法

発掘調査面積はＡ地区260㎡、Ｂ地区80㎡で、まずは試掘調査の結果をもとに重機による表土掘削を行った。基準杭の設定は調査区に対応して任意に行い、２×２ｍを一区画とした。その後、人力により遺構の検出と掘削を行い、引き続き、図化・記録作業に入った。調査期間は５月20日～７月22日であった。

3　座標軸の設定

国土地理院設定、第７座標系公共座標のうち、Ｘ＝74.653・Ｙ＝－1.238の点を０原点として設定した。尚、Ｘ軸の方向はＮ－31°－Ｅを示す。　（堀内）



第２図　調査対象範囲と区割図（1／2,000）

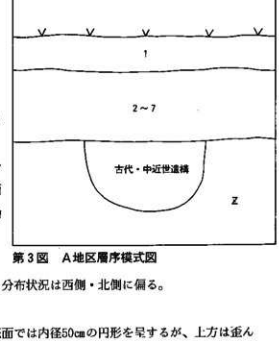
Ⅲ　調査の概要

1　A　地　区

(1)　概況と層序

当地区の現況は水田であり、北側・東側は道路に画されている。調査では古代から近世までの遺構が検出されたが、後世の整地による削平により、遺構検出面は一面のみであった。

基本層序を大まかに述べると、上から順に第1層：黒褐色粘質シルト（表土）、第2～7層：整地層、Z層：地山となる。遺構は地山面に検出され、遺物包含層は遺存しない。地山までの深さは地表から約20～50cmで、東側がやや浅く20cm前後の深さで礫が隆起する。



第3図　A地区層序模式図

(2)　遺　　構

検出した遺構は、井戸1基、土坑20基、溝4条、ピット等である。分布状況は西側・北側に偏る。

井戸（SE01）

石組井戸で、掘方は直径150cm深さ130cmを測る。石組の形状は、底面では内径50cmの円形を呈するが、上方は歪んでおり検出面で内径65～90cmの楕円形となる。石組には長細い石を使用する他、石臼等の石製品の転用が10個確認された。それらは下から1・3・5・7段目に組まれており、約半分が1段目に検出された。また、裏込めには石組に沿うように更に石が積まれている箇所もあった。覆土中には廃棄の際に投げ込まれた石が多く混ざり、上部からは越中瀬戸・石臼・古銭・輪羽口が出土した。底部に水溜の施設は確認されなかった。尚、現在の湧水面は、検出面から約90cmの深さにある。

土坑

SK14、SK15、SK18　調査区北東側に位置し、覆土に焼土・炭・鉄滓を含む土坑群である。SK14・18はSD02を切る。SK14は平行四辺形を呈する土坑で、東西軸460cm深さ55cmを測る。床面は東側が深く西に向かって緩やかに傾斜する。SK15は楕円形に近い土坑で、東西軸270cm南北軸350cm深さ50cmを測る。床面は北側がやや深くなる。SK18は、北側・東側が調査区外にのびる為、規模は不明である。南端で重複するSK14・15の出土遺物と同一個体が出土しており、関連性が考えられるが、試掘トレンチによる削平により詳細は不明である。西側に掘り込まれる溝状遺構は両端が深く、粘質土（一部粗砂混じり）で埋まっていた。溝状遺構の西端は楕円形に窪み、上部から下部まで焼土・炭が厚く堆積していた。一方東端は溝状に深くなり、下部に焼土と炭が堆積していた。SK18では溝状遺構が位置する部分に焼土・炭が特に集中し、なかでも⑥層には鉄滓が多量に含まれ輪羽口も数点出土したが、炉壁等の痕跡は確認できなかった。どの土坑も底部に砂が堆積しており、溝状遺構以外は覆土全体に礫が混じる。尚、土坑群上のピットは層位から考えて土坑廃絶後のものである。

SK09・SK10・SK11　調査区北西側に位置する土坑群である。SK09は南北360cm以上東西280cm以上深さ50cmの土坑で、北西側が調査区外にのびる。また底面には東西にのびる溝状遺構が掘り込まれており、その幅は80～100cm、深さはSK09底面から30cmを測り、覆土からは越前が出土した。⑤層以上はブロック状の土が混じる為、人為的に埋められた可能性が大きい。SK10は幅80cm深さ38cm、SK11は幅110cm深さ40cmで、ともに西側は調査区外にのびる。また、SK11はSD03に切られる。

SK12　SD03に切られる為、東半分は底部付近しか残っていないが、平面形はおそらく一辺120cmの円形に近い隅丸方形を呈していたものと思われる。覆土は約50%が鉄滓、約15～20%が炭粒、約5%が焼土で、これらを合わせる

と覆土の3／4を占めることになる。床面は、鉄分の沈着がわずかに見られやや堅くしまるが、焼けてはいない。

ＳＫ13　南北に長い楕円形の土坑で、長軸410㎝短軸120㎝深さ65㎝を測る。掘り込みの角度は直角に近い。覆土上層には焼土・炭粒・礫が含まれる。

ＳＫ01・ＳＫ02・ＳＫ04・ＳＫ05・ＳＫ06・ＳＫ07・ＳＫ08・ＳＫ20・ＳＫ21　南西部に集中する土坑群で、平面形は楕円形を呈し、配置に規則性は認められない。これらは形態によって３つに分かれ、それぞれをＡ：規模が小さく深い、Ｂ：規模が大きくやや深い、Ｃ：規模が大きく浅いとすると、ＳＫ06・07・08・20・21はＡタイプで長軸42～55㎝深さ42～53㎝を測り、ＳＫ04・05はＢタイプで長軸58～66㎝深さ30～40㎝、ＳＫ01・02はＣタイプで長軸58～80㎝深さ14～20㎝を測る。

ＳＫ03　南北に長い隅丸長方形の土坑で、長軸200㎝短軸80㎝深さ30㎝を測る。

ＳＫ19　円形に近い楕円形の土坑で、長軸215㎝短軸190㎝深さ40㎝を測る。

溝

ＳＤ01　南北方向に走る溝で、ＳＫ06に突き当たり切られる。幅は30㎝で、深さは15㎝と浅い。

ＳＤ02　南北方向に走る溝で、ＳＫ14・18に切られる。幅は80～150㎝と差があり、深さは50～80㎝で北側が深い。断面観察では酸化鉄の沈殿が１～２重見られ、それを境に覆土の堆積の仕方に違いが見られる。出土遺物の多くは須恵器・土師器等の古代の遺物で、中・近世の遺物は上層の⑧′層に入り、Ｘ10付近に集中する。

ＳＤ03　南北方向に走る溝で、ＳＫ12を切り、ＳＫ04・05・07・08に切られる。幅は70㎝で、深さは35㎝を測る。覆土には鉄滓・礫が多く含まれ、出土遺物には越中瀬戸が多く見られる。

ＳＤ04　東西方向に走る溝で、幅60㎝深さ25㎝を測る。

(3)　遺　　物

①　第７次調査区出土遺物の概要

今回の調査で出土した遺物は、須恵器、土師器、中世土師器、珠洲、瀬戸・美濃、輪羽口、釘、越前、越中瀬戸、伊万里、石製品（石臼、砥石、暖房具等）がある。主体をなすのは、Ａ地区では中世末から近世初頭の遺物で、Ｂ地区では古代の遺物である。以下、出土数が多い遺物の概要と器種分類を記述する。

須恵器　器種には、蓋・杯・硯・壺・甕・高杯・擂り鉢がある。

杯　高台がつかないものを杯Ａ、高台がつくものを杯Ｂとし、更に形態から各々を２類に分類した。Ａ１・Ｂ１類は底部と体部の境が丸いもの、Ａ２・Ｂ２類は底部と体部の境が角張るものとした。それぞれ器高が浅いものと深いものがある。

杯蓋　口縁の形態から５類に区分した。１類はかえりが付く、２類は鋭角に屈曲、３類は断面三角形、４類は丸く巻き込む、５類は偏平なものである。つまみの殆どは宝珠形だが、大型品には環状のものもある。

土師器　器種には、甕・鍋・皿・碗・甑がある。

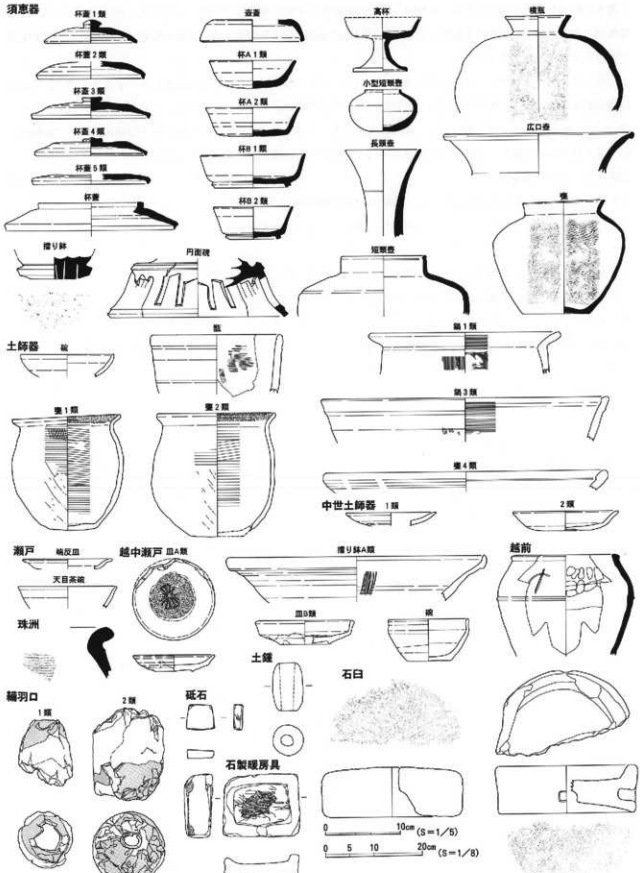
甕・鍋　口縁の形態から４類に区分した。１類は端部を丸くおさめる。２類は端部を面取りする。３類は途中で内に折れ曲がる。４類は端部を内側に巻き込む。

中世土師器　口縁の形態から２類に区分した。１類は体部が底部から緩やかに立ち上がり、端部が尖るもの。器壁が薄く、器高は浅い。２類は口縁端部を強めになでるもの。器壁が肥厚する。

越中瀬戸　器種には、皿・碗・擂り鉢がある。

皿　丸皿（Ａ類）と「向付」（Ｂ類）がある。また高台のつくりで１：削り出し、２：削り込みに分類した。全て釉は内禿で、外底面は無釉である。

碗　丸碗と天目茶碗がある。殆どが輪高台であり、高台付近の外面は無釉である。



第4図　出土遺物一覧（須恵器の横瓶・広口壺・甕，越前，砥石，暖房具，石臼は1／8，その他は1／5）

擂り鉢　縁端部の外面に縁帯をつくるタイプ（A類）と口縁部を折り返すタイプ（B類）がある。

石臼　完形品は無く、殆どが真二つに割れている。挽き木の取り付け方法は横打ち込み式で、側面に四角の穴が開いている。目のパターンは、上下共に八分画で、副溝は５～７条である。直径の平均値は、上臼30.3cm・下臼30cmである。擂り減り方は様々であり、高さは上臼10～14cm・下臼５～12.5cmである。臼面のふくみは上臼は平均3.3cmと大きいが、下臼は平均0.9cmと小さくほぼ水平のものもある。上臼上縁のくぼみの平均値は3.3cmで、段がつくものと丸みをもつものがある。供給口は円形で、入口側がひらいている。芯棒孔は貫通しており、下場のえぐりが大きい。

鞴羽口　径が小さく器壁が薄いもの（１類）と、径が大きく器壁が厚いもの（２類）の２つの形態に分かれる。前者は径６cm～7.5cm・内孔径３～3.5cm・器厚1.8～２cmを測り、胎土の粒子はかなり粗い。後者は径9.5cm～9.8cm・内孔径1.6～2.8cm・器厚2.5～４cmを測り、胎土は粒子が緻密でスサが含まれる。どちらも鞴側の端部はガラス化し、溶解物が付着している。

②　A地区遺構別出土遺物

A地区で出土した遺物は、須恵器、土師器、中世土師器、珠洲、瀬戸・美濃、鞴羽口、釘、越前、越中瀬戸、伊万里、石製品（石臼、砥石、暖房具等）がある。以下、各遺構毎に記述する。

井戸（ＳＥ01）

古銭、土師器、須恵器、鞴羽口、越中瀬戸、石製品が出土した。石製品以外は、全て②層より出土した。43～45は越中瀬戸である。43は丸碗で、鉄釉を施す。44は皿Ａ２類で、灰釉を施し、底部内面には十六弁菊の印花文を押印する。また、見込みと体部外面には煤が付着している。45は皿Ｂ類で、灰釉を施す。46は鞴羽口の２類で、内孔は中心から少し外れる。最大径は9.5cm、内孔は長軸2.8cm・短軸2.1cm、器厚2.5～４cmを測り、被熱範囲は水平状態から28度前後傾く。古銭は剥離が激しく判読不能の為、図化しなかった。98～103・106～109は井戸の石組みに転用されていた石製品である。97～99は上臼である。97は直径30cm高さ10cmふくみ２cm、上端のくぼみは３cmで段になる。ＳＥ01検出面より出土した。98は直径31cm高さ14cmふくみ４cm、上端のくぼみは2.5cmで段になる。目は擂り減って、殆ど無くなっている。99は直径30cm高さ11.5cmふくみ４cmで、上端のくぼみは4.5cmで丸みをもつ。目は擂り減って、殆ど無くなっている。挽手孔は側面中央部に取り付けられたものの他、擂り減って臼面に達した古い挽手孔も残される。100～103は下臼である。100はかなり擂り減っており５cmの厚みしかない。106～109は用途が不明確な石製品である。106・107は加工が粗く、一面の中央部に炭化物痕が残っている。108は砂岩で磨滅が激しい。109は四角い石の一面の中央部をボール状にくぼめ、周囲を粗く加工したものである。くぼみ部分が磨耗しているため、何かを擂りつぶす為に使用された可能性がある。

土坑

ＳＫ02　須恵器、土師器が出土した。１は須恵器の壺である。

ＳＫ03　須恵器、土師器、鉄滓が出土した。２・３は杯蓋で、２は５類、３は４類である。４・５は土師器の甕で、４は４類、５は１類である。

ＳＫ09　須恵器、土師器、瀬戸美濃、越前が出土した。６は越前の窯口壺で、溝状の掘り込み部分とその付近より出土した。口縁部は断面が三角を呈し、肩部にからかき文のヘラ記号が刻まれる。肩部内面には粘土を接合した継ぎ目と押圧痕が残る。肩部と体部の境に凸帯が施されるもので、同様の遺物は福井県乗泉寺遺跡に出土している。Ⅴ期に帰属するものと思われる。７～９は瀬戸美濃の茶碗であり、７・８は鉄釉が、９は黄灰色の薄い釉が掛かる。７は口縁部が直線的に立ち上がり、外面を軽くおさえる。８は断面に漆が付着している。

ＳＫ10　須恵器、土師器、鉄滓、越中瀬戸が出土した。10は越中瀬戸の皿Ａ類で、灰釉が掛かる。

ＳＫ11　須恵器、土師器、土錘、鉄滓が出土した。11は土錘で、片方の端部を面取りする。長さは6.2cm、最大幅は

3.2cm、内孔径は1cmを測る。

ＳＫ12　須恵器、土師器、越中瀬戸、鉄滓が出土した。12は須恵器の短頸壺、13は越中瀬戸の皿Ｂ類で灰釉が掛かる。

ＳＫ13　須恵器、土師器、土錘、越中瀬戸、鉄滓が出土した。14は須恵器の甕の口縁部である。15は土錘で、長さは6.8cm、最大径は3.4cm、内孔径は1.3cmを測る。16は越中瀬戸の皿Ａ類である。

ＳＫ14　須恵器、土師器、中世土師器、瀬戸美濃、越中瀬戸、釘が出土した。22～25は須恵器。22は杯Ａ２類、23は杯Ｂ２類、24は鍋の口縁部、25は甕の頸部である。26・27は土師器。26は甕の胴部から頸部、27は皿の高台である。28は角釘で、太さは0.6cmを測る。29は中世土師器で、２類である。30は瀬戸美濃の端反皿で、灰釉が掛かる。31・32は越中瀬戸。31は丸皿で、鈍い暗紫色の鉄釉が掛かる。32は碗で、全面に錆釉が掛かり、底部は回転糸切り痕を残す。

ＳＫ15　須恵器、土師器、中世土師器、珠洲、越中瀬戸、鉄滓、砥石が出土した。18は須恵器の杯Ａ２類である。19は中世土師器の２類で、内面にタールが付着する。20は珠洲の甕である。21は砥石である。平面形は台形を呈し、長さ5.3cm・幅最小4.6cm最大5.9cmを測る。片面は剥離している。104は直径28cmの下臼で、検出面から出土した。

ＳＫ17　越中瀬戸が出土した。17は皿Ａ２類で、錆釉が掛かり、内面には釉止めの段がつけられている。

ＳＫ18　須恵器、土師器、土錘、珠洲、越中瀬戸、鞴羽口、鉄滓、釘が出土した。33・34は須恵器で、33は杯Ａ１類で、34は杯Ｂ２類である。35・36は土師器の碗である。37は珠洲の壺である。38は越中瀬戸の丸碗で、茶褐色の鉄釉が掛かる。ＳＫ14・15で出土したものと同一個体であった。39・40は鞴羽口の２類で、⑥⑩層より出土した。39は残存最大径9.3cm・内孔径2.8cm・器厚３～４cmで、40は最大径9.8cm・内孔径1.6cm・器厚3.5cm前後を測る。

ＳＫ19　須恵器、土師器、鉄滓が出土した。41は須恵器の杯口縁部である。42は土師器で甕２類である。

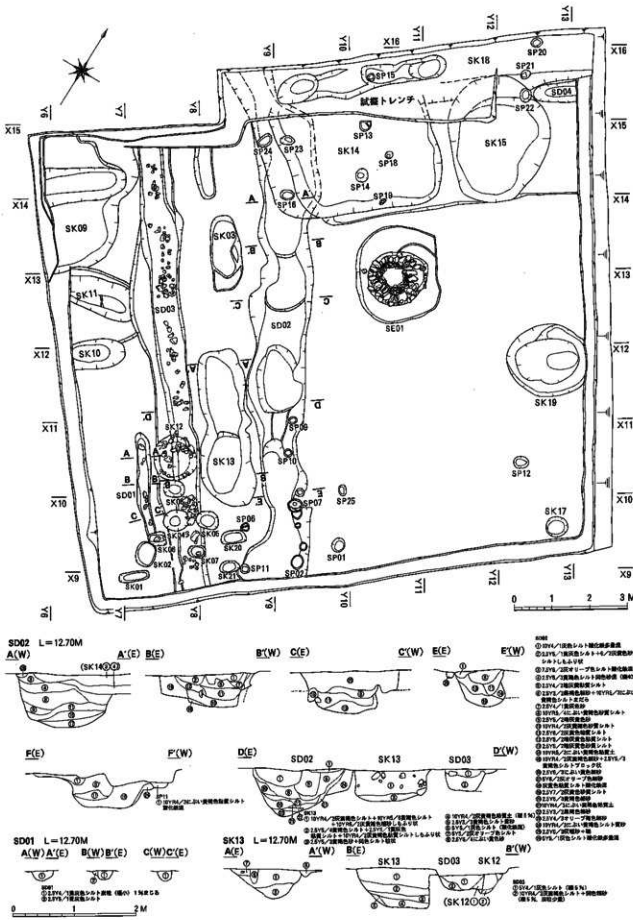
溝

ＳＤ02　須恵器、土師器、土錘、珠洲、越中瀬戸、鉄滓が出土した。47～60は須恵器。54～57は杯蓋で、54は２類、55・56は３類、57は４類である。47～52は杯で、47はＡ１類、48・49はＡ２類で器高が浅いタイプ、50はＢ１類、51・52はＢ２類である。53は台付きの壺の底部と思われ、沈線が胴部と底部の外面に刻まれている。58は長頸壺で、59・60は円面硯。61～70は土師器。61～66は甕で、61は３類、62・63・65は１類、66は２類、64は４類である。67は皿で、内面の胎土が黒変している。68・69は碗で、69は底部に回転糸切り痕を残す。70は鍋の持ち手である。71は土錘で、残存長６cm・残存径3.1cm・内孔径1.2cmを測る。72は珠洲の甕である。73・74は越中瀬戸。73は擂り鉢の底部で、全面に錆釉が掛かり、底部には回転糸切り痕を残す。卸し目は使用により磨耗している。74は碗である。

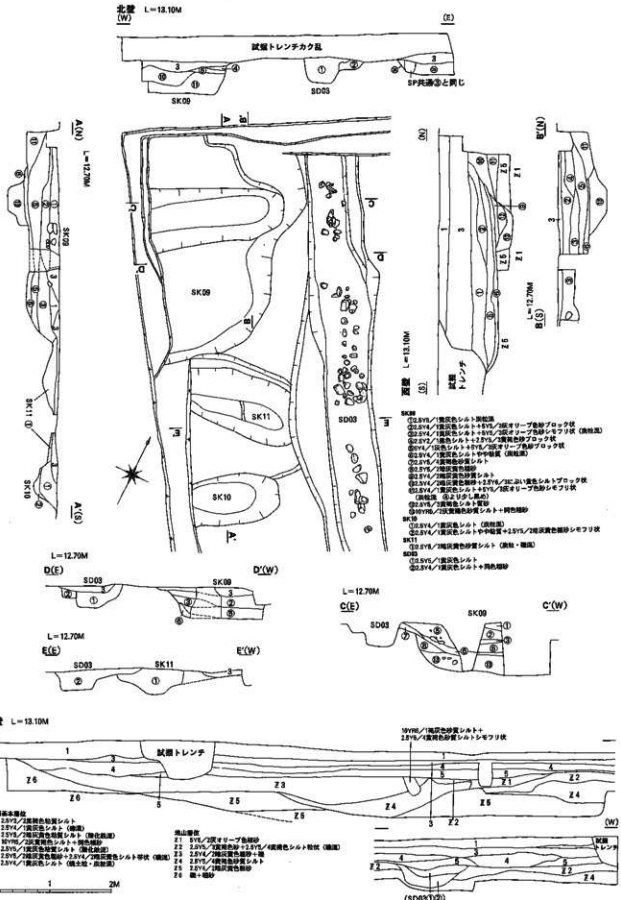
ＳＤ03　須恵器、土師器、越中瀬戸、鉄滓が出土した。75は須恵器の甕口縁部と思われるもので、外面に突帯が施される。76～85は越中瀬戸。77～81は皿である。76は天目茶碗で、茶褐色の鉄釉を掛ける。82は丸碗で、鉄釉を施した後灰釉を回し掛けている。77は皿Ａ１類で、薄い灰釉を掛け、内面に釉止めの段を施す。78は皿Ａ１類で、錆釉を掛ける。79は皿Ｂ１類で、灰釉を掛け、内面に釉止めの段を施す。80・81は削り込み高台で、灰釉を施す。83～85は擂り鉢の底部で、全面に錆釉を掛ける。内面の卸し目は使用により磨耗する。85はＳＤ02出土遺物と同一個体である。

表土・整地層

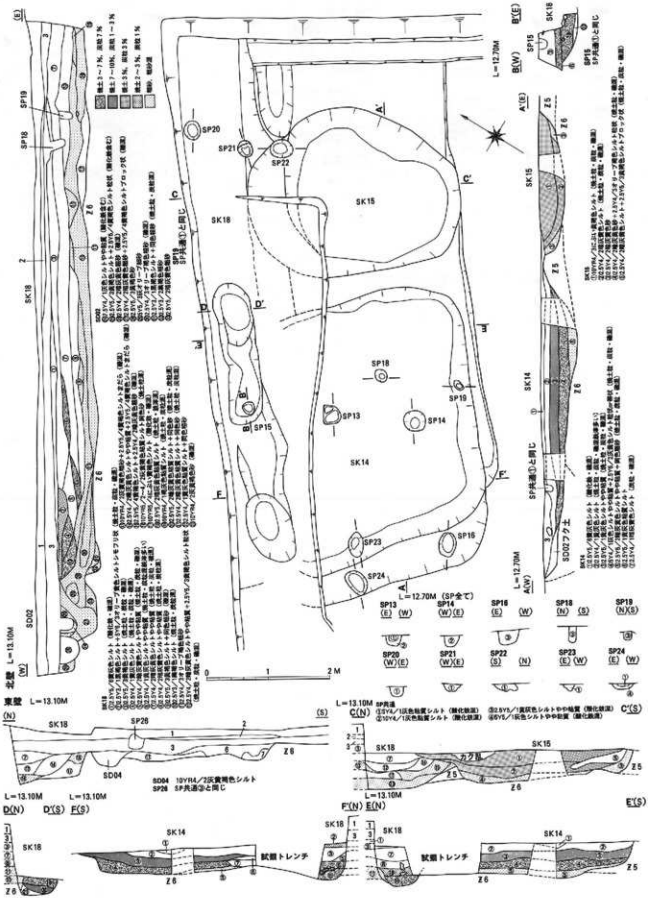
86～90は須恵器である。86は蓋で、２類で環状のつまみがつく大型品。87は杯Ａ１類、88は杯Ａ２類である。89は壺の高台である。90は甕の頸部で、外面に２条の波状文が施される。91は土師器の甕と思われる。92・93は越中瀬戸の擂り鉢Ａ類である。94は中世土師器で１類である。95は瀬戸・美濃の端反皿で、灰釉を掛ける。96は伊万里の染付碗である。灰色を帯びた厚い透明釉が掛かり、口縁部外面に斜格子が、体部には草花文を描いていたと思われる。105は石製暖房具の側面部である。内面には工具痕が残り、中央部に煤が付着している。同様の遺物として福光町梅原胡摩堂遺跡の出土品がある。　（片岡）



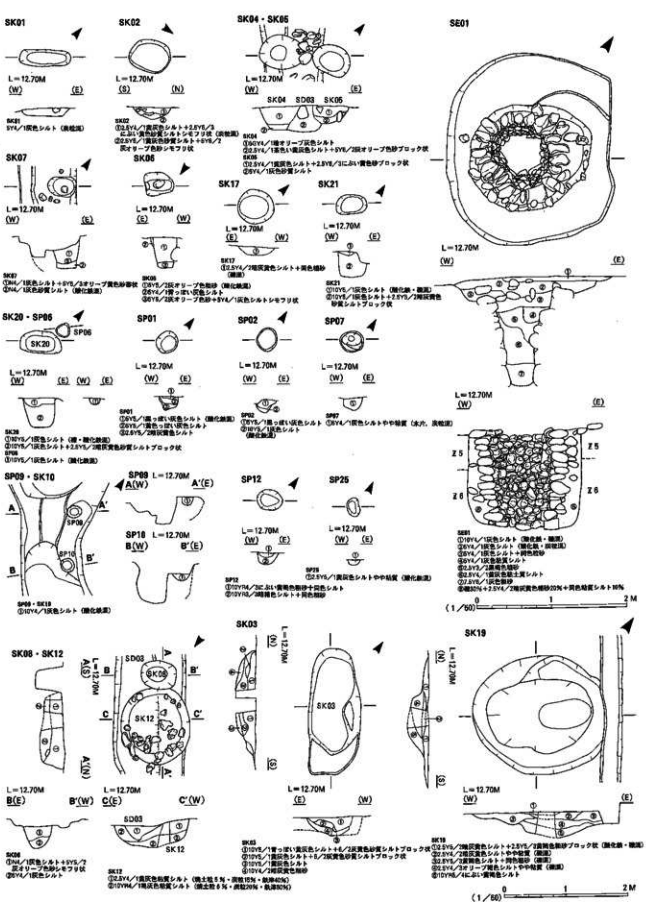
第５図　Ａ地区遺構配置図（1／100）及び遺構断面図（1／60）



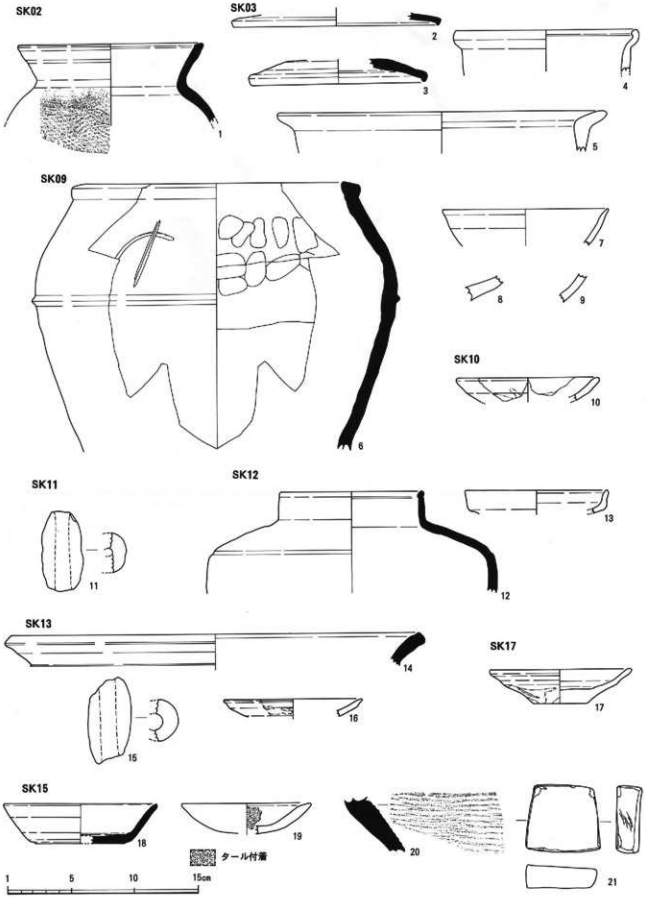
第 6 図　A地区遺構平面図・断面図（1／60）



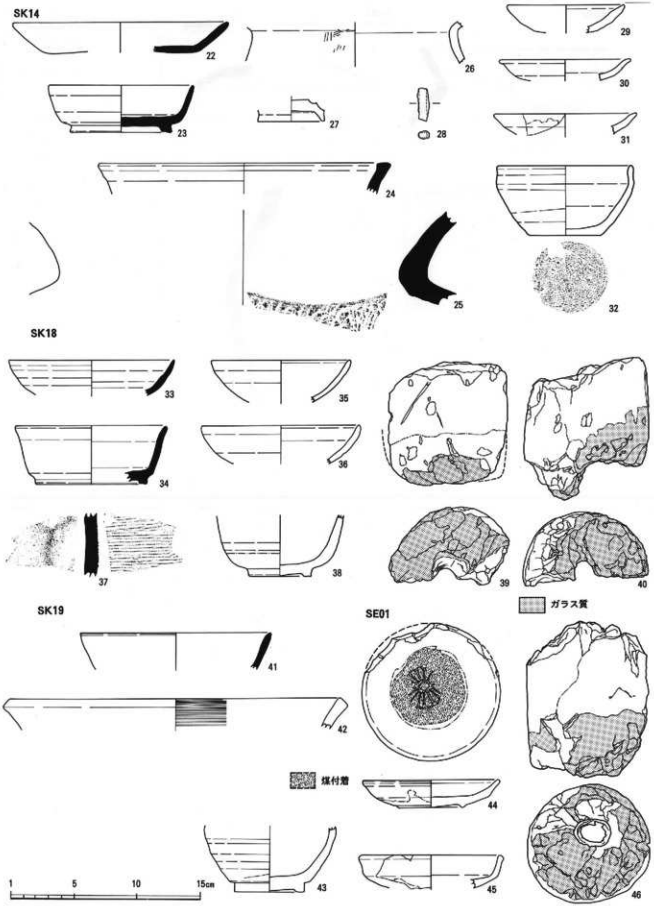
第７図　Ａ地区遺構平面図・断面図（1／60）



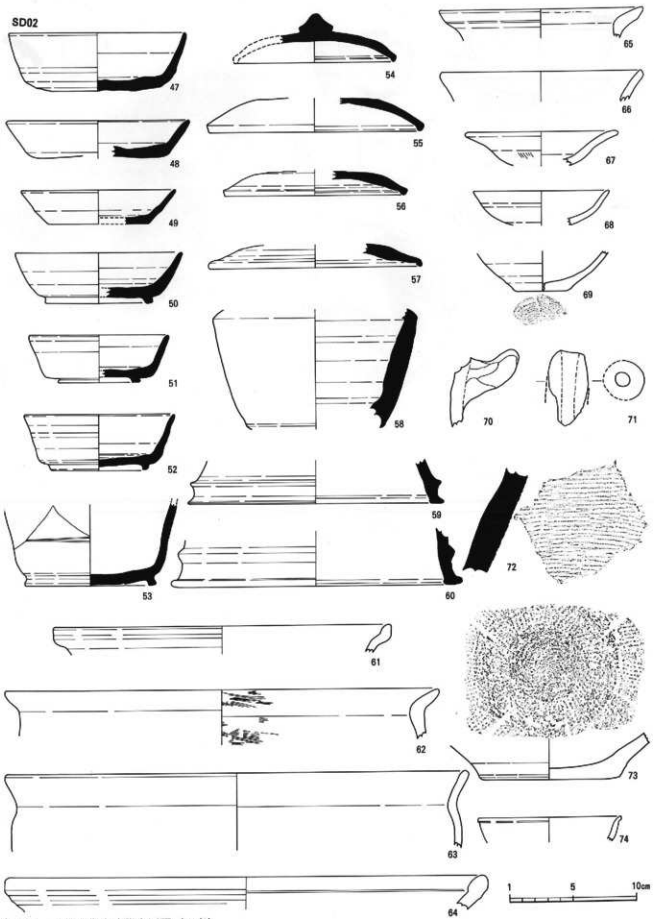
第８図　Ａ地区遺構平面図・断面図（ＳＥ01は1／50，他は1／60）



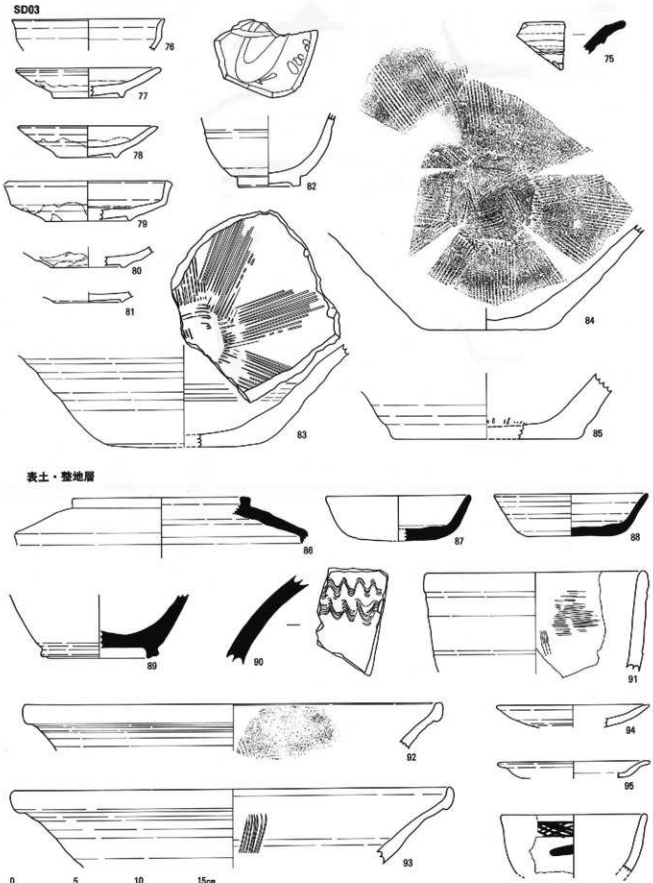
第 9 図　A地区出土遺物実測図（1／3）



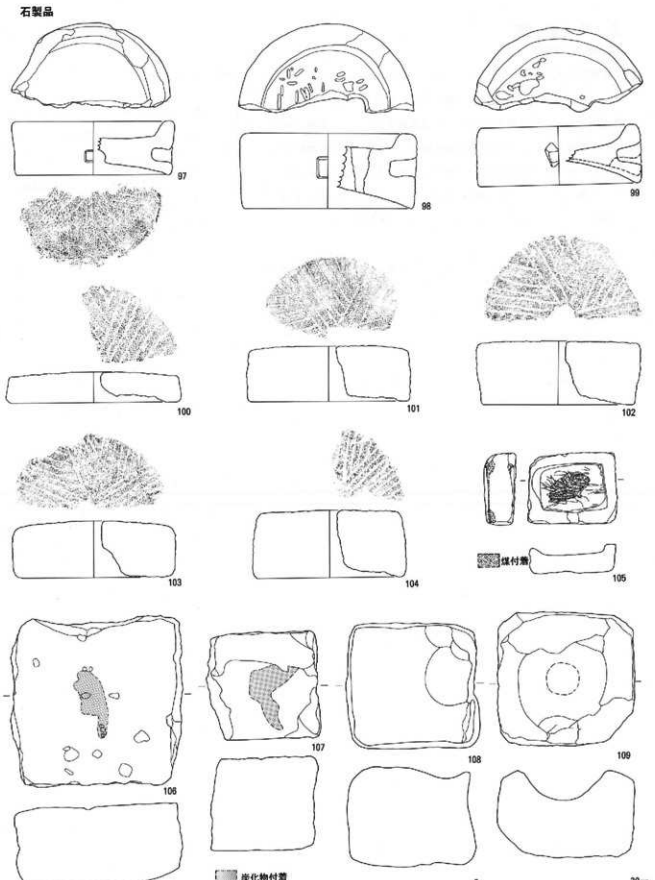
第10図　A地区出土遺物実測図（1／3）



第11図　A地区出土遺物実測図（1／3）



第12図　A地区出土遺物実測図（1／3）

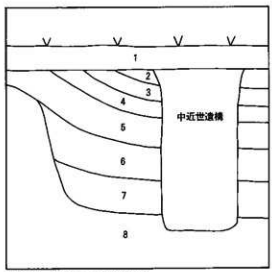


第13図　A地区出土遺物実測図（1／7，104はSK15，105は整地層，その他はSE01）

2　B　地　区

(1)　概況と層序

B地区は西から東へ落ち込んでおり、旧地形は谷状に低くなっていたようである。基本層序は1層：黒褐色粘質土（表土）、2層：黄褐色シルト（酸化鉄混、中・近世遺構構築面）、3～4層：黄灰色＋灰黄褐色シルト（炭化物・酸化鉄混）、5層：暗灰黄色粘土質シルト（炭化物・酸化鉄混、古代土器多量含む）、6層：灰白色シルト（酸化鉄混）、7層：黄褐色砂質シルト（地山）、8層：砂礫（地山）である。表土から約140cmより下は湧水層である。



第14図　B地区層序模式図

(2)　遺　　構

検出した遺構は、上層（中・近世）・下層（古代）の2面があり、上層では井戸1基、溝3条、土坑等が確認でき、下層では土器廃棄場等が確認できた。

(a)　上層

井戸（ＳＥ01）

平面形は長軸180cmの楕円形で、深さ170cmを測る。底部に水溜の施設は確認できなかった。覆土は①～④層まで人為的に埋められている。尚、現在の湧水面は、検出面から100cmを測る。

溝

ＳＤ01　南北方向に走る溝で、幅34～64cmである。深さは15cmと浅い。

ＳＤ02　南北方向に走る幅280cmの溝で、深さ115cmを測る。溝の両肩には、一段の平坦面が認められる。遺物は、古代・中世・近世の遺物が出土しているが、古代の遺物は溝が古代の土器廃棄場を掘り込んで形成されていることから、その流れ込みであると思われる。中世の遺物は①～③・⑥層で確認した。近世の遺物は①層で確認した。

土坑（ＳＫ01）

平面形は長軸100cmの楕円形で、深さ38cmを測る。

(b)　下層

土坑

ＳＫ02　平面形は直径45cmの円形で、深さ35cmを測る。

ＳＫ03　平面形は長軸45cmの楕円形で、深さ17cmを測る。

その他

土器廃棄場　調査区東半分に土器の広がりが確認できたが、一部ＳＤ02・ＳＥ01に切られている。遺物は完形品はなく、全て細片化している。遺物量は整理箱約25箱分である。

墳砂　土器廃棄場から多数の墳砂を確認した。これは、第4次調査で確認された地震による液状化墳砂（寒川1992）と考えられる。幅1～4cmで、土器廃棄場を切り、4層の下で止まっている。方位は北を指す。

(c)　時期不明

溝（ＳＤ03）

南北方向に走る溝で、幅28～46cmである。

不明遺構（ＳＸ01）

南北方向に走る溝状遺構で、幅60～79cmである。深さは15cmと浅い。遺物は鞴羽口・鉄滓等が出土している。

(3) 遺　物

図化した遺物は、土器廃棄場（110～113・115～174・176・177・180・181・183～190・192～194・196～209・211・212・217～219）、ＳＤ02（114・175・178・179・182・191・195・210・213～215・220～234・237・241・242）、ＳＤ03（216）、ＳＸ01（236・238～240）、遺構外（235）である。

古代の遺物

古代の遺物は、須恵器、土師器である。主に、土器廃棄場で出土した。

須恵器

110～127は杯蓋である。110は杯蓋１類。111～113は杯蓋２類。114～119は杯蓋３類。120～124は杯蓋４類。125～127は杯蓋５類。110は７世紀後半、111～127は８世紀代に比定できる。110～127の杯蓋の頂部はヘラケズリされるものが殆どで、ヘラケズリの後にナデ調整されているものもある。118は「＋」、123は「＝」のヘラ記号が内面に描かれている。128～148は杯Ａ、149～170は杯Ｂである。128～138は杯Ａ１類。139～148は杯Ａ２類。149～163は杯Ｂ１類。164～170は杯Ｂ２類。148は口径15.2㎝・器高5.2㎝、156は口径16.4㎝・器高7.6㎝、163は口径14.8㎝、器高7.2㎝の大型の杯である。137は口縁端部に段がつく杯で、８世紀前半に比定できる。128～170の杯Ａ、杯Ｂ全ての外底面に回転ヘラキリ痕が残り、回転ヘラキリ後にナデ調整されているものもある。171は小型高杯である。172～175は小型短頸壺である。176は鍋の把手である。177は双耳瓶の耳部である。178は透かし窓を持つ円面硯である。179は遮光で、８世紀後半～９世紀に比定できる。180は擂り鉢の底部である。181・182は長頸壺で、182には沈線が認められる。191は広口壺である。183～186は壺の底部である。187～190・192は甕である。193・194は横瓶である。181・182・193の外面、183・184の壺の内面の底に自然釉が掛かる。

土師器

195は碗の口縁部である。196～204は甕１類である。205～210は甕２類である。211～213は鍋１類である。214は鍋３類である。

中近世の遺物

中・近世の遺物は中世土師器、瀬戸、青磁、珠洲、越中瀬戸、近世陶器である。主にＳＤ02で出土した。

中世土師器・瀬戸・青磁・珠洲

220～223は中世土師器である。220・221は１類である。222・223は２類である。224は瀬戸の天目茶碗で、内外面とも鉄釉を施す。225は青磁の碗である。226～231は珠洲である。226～230は珠洲の甕である。226は珠洲Ⅳ期、227は珠洲Ⅴ期（吉岡1994）に比定できる。227は断面に漆が付着している。231は珠洲の擂り鉢で、卸し目は2.6㎝に13条である。

越中瀬戸・近世陶器

232～235は越中瀬戸である。232・233は皿である。232は皿Ａ１類で、鉄釉を施す。233は皿Ａ１類で、灰釉を施し、内面に釉止めの段を持ち、見込みに十六弁菊の印花を押捺する。234・235は擂り鉢である。234は擂り鉢Ｂ類で、三角形に尖る口縁端部の上面が少し窪むものである。235は擂り鉢Ａ類で、縁帯が少し垂下するものである。234・235ともに錆釉を施す。236は近世の小型短頸壺である。

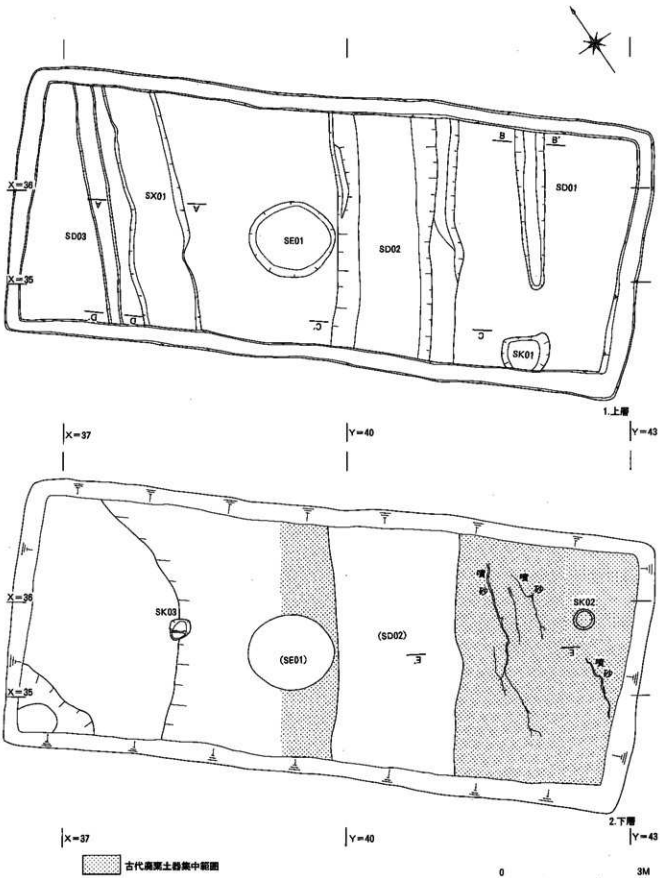
その他の遺物

その他の遺物は、土錘、硯、鞴羽口、石臼である。

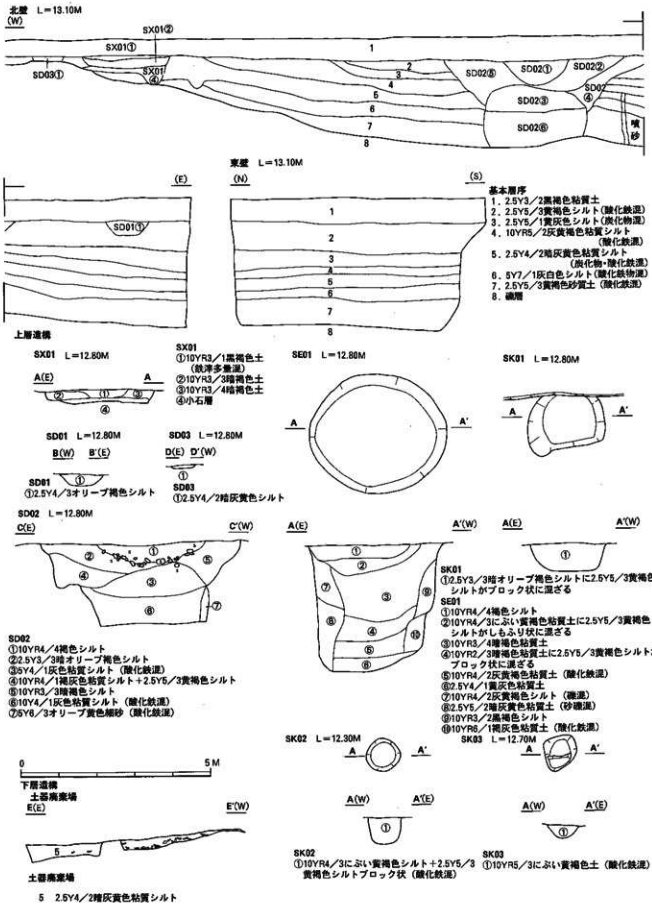
土錘・硯・鞴羽口・石臼

215～219は土錘である。237は裏面に長方形の双脚を持つ硯である。238～240は羽口１類で、241は羽口２類である。242は石臼で、上臼である。

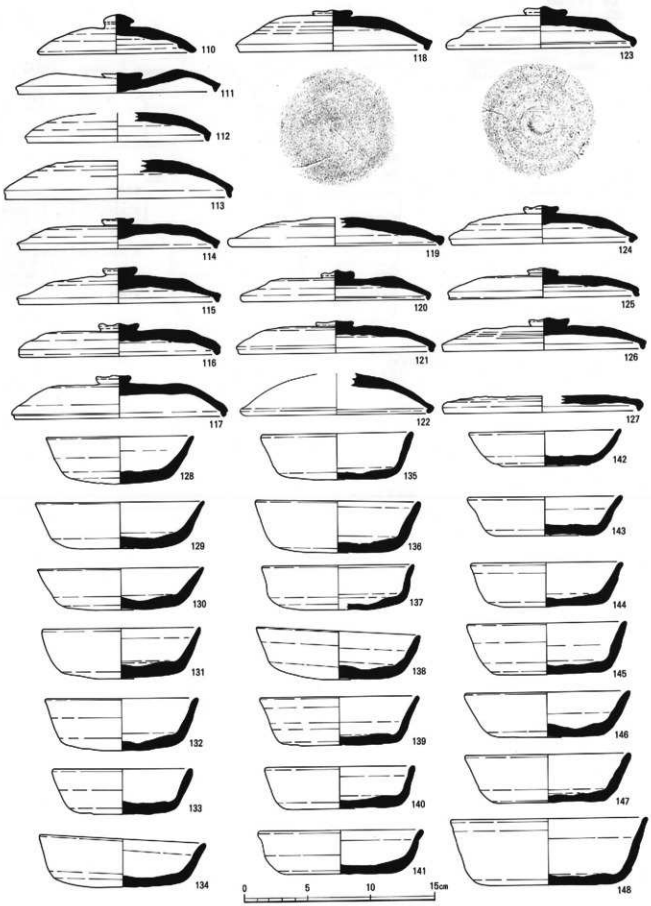
（潟内）



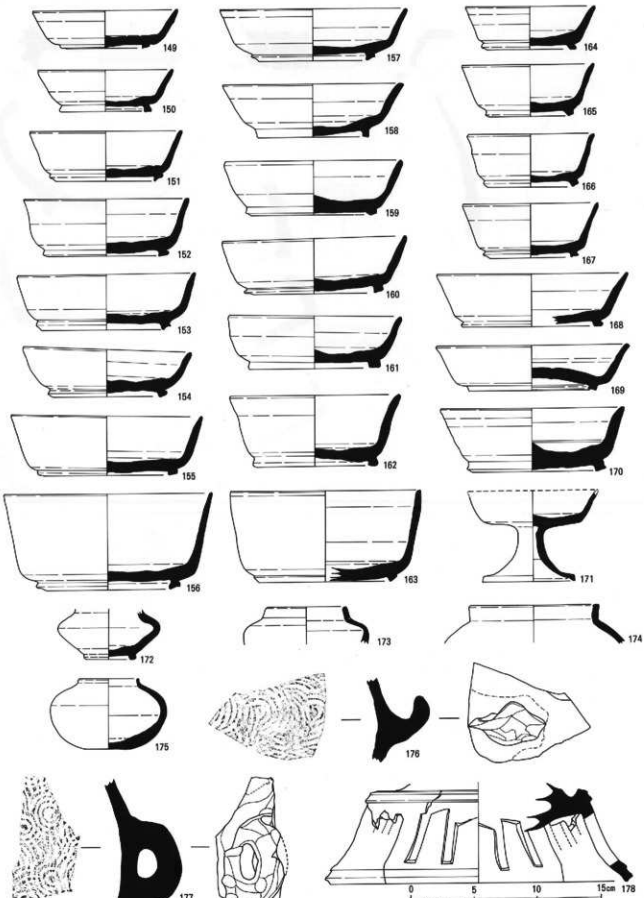
第15図　B地区遺構配置図（1／80）



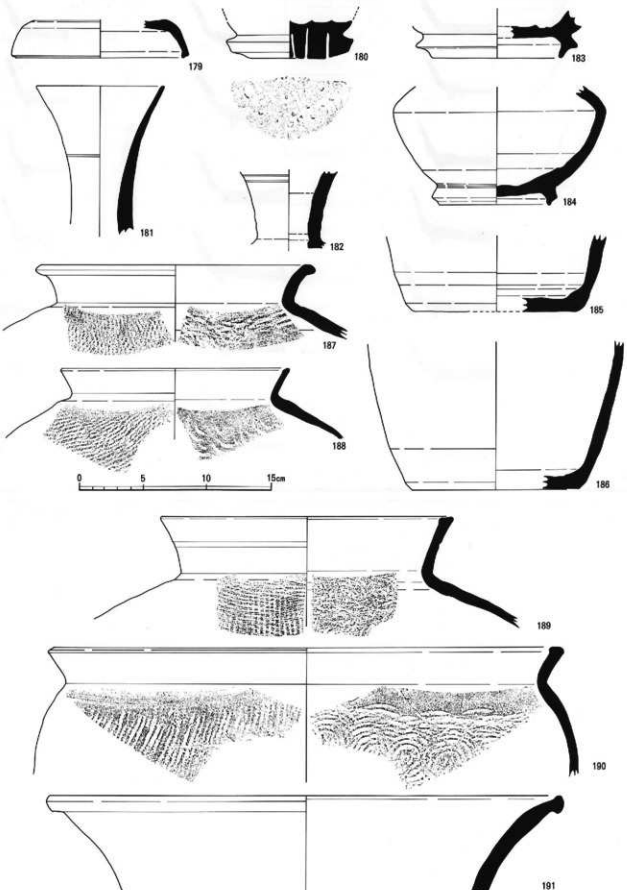
第16図　B地区遺構平面図・断面図（1／50）



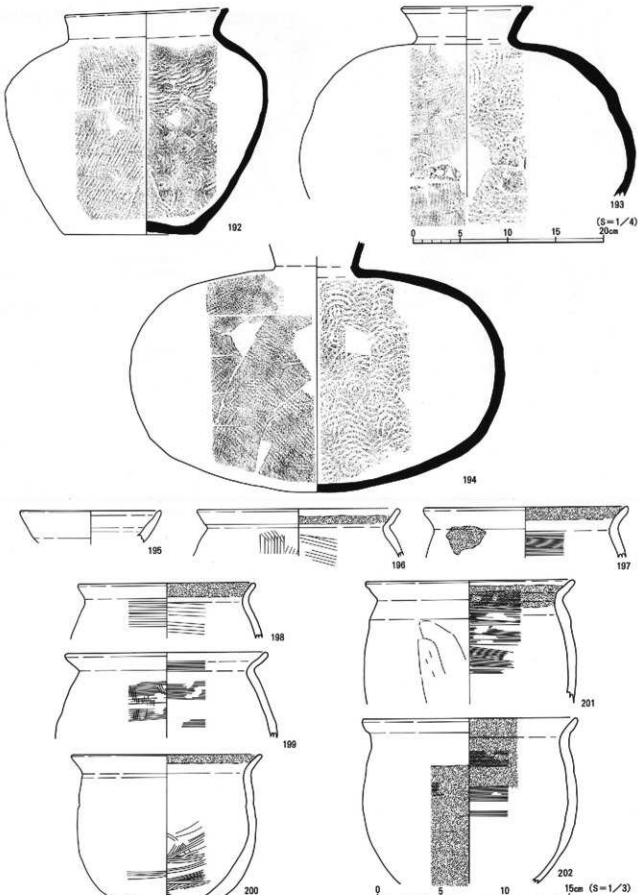
第17図　B地区出土遺物実測図（1／3）



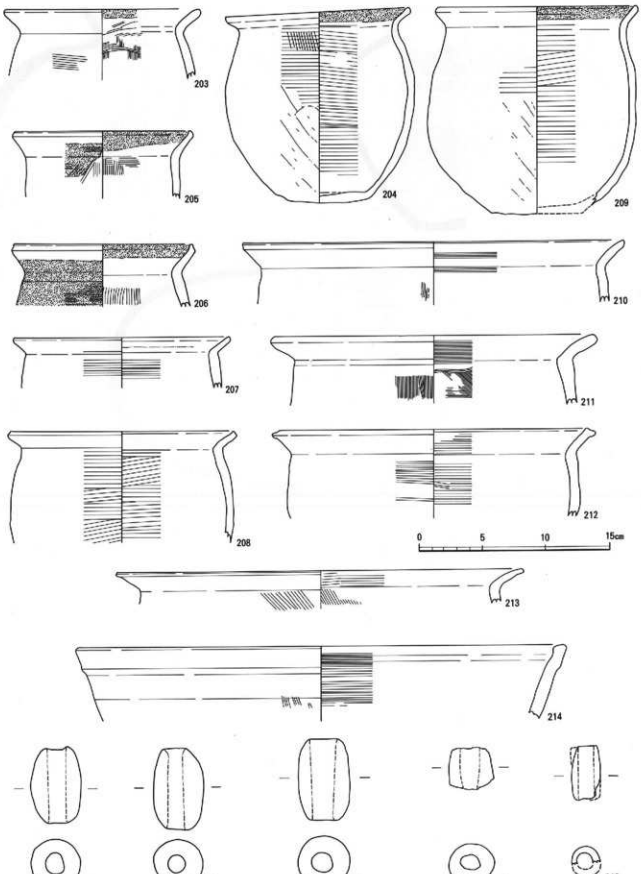
第18図　B地区出土遺物実測図（1／3）



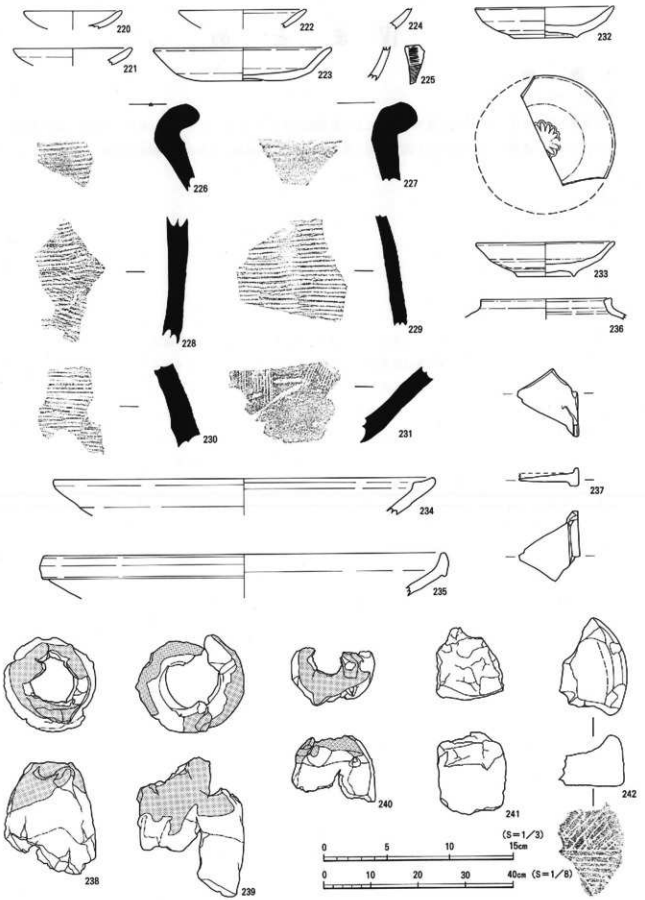
第19図　B地区出土遺物実測図（1／3）



第20図　B地区出土遺物実測図（1／4，192～194，1／3，195～202）



第21図　B地区出土遺物実測図（1／3）



第22図　B地区出土遺物実測図（1／3、242は1／8）

Ⅳ ま と め

1 遺 構

(1) A 地 区

各遺構の帰属年代については、後世の削平により検出面が全て同一になっていた為、層位的な判断は殆ど出来なかった。その為、遺構どうしの切り合い関係や出土遺物等により、各遺構が形成された順番を推測してみると次のようになった。

古代

①ＳＤ02

中世末～近世初頭

②ＳＫ14・15・18、ＳＫ12

③ＳＤ03

④ＳＫ04・05・07・08・11

①のＳＤ02については、出土遺物の大半は古代のものであるが、上部からは中・近世の遺物も出土している。このことから溝は古代に形成され、廃絶後は自然堆積によって殆どが埋まったが、中・近世になってから痕跡として残った窪みに沿って溝が再掘削された可能性が考えられる。

また、②の時期に形成されたＳＫ14・15・18は、出土遺物や覆土の含有物から鍛冶もしくは小規模な製鉄作業をする遺構と考えられる。ＳＫ18の溝状遺構付近には鞴羽口・炭・鉄滓・焼土が集中して検出される為、ここに鞴を装着した炉等があったのかもしれない。またＳＫ18に接続していたＳＫ14・15は、作業空間等の性格のものであった可能性がある。これらの遺構の底部に砂が堆積していたのは、防湿の為に敷いたものとも考え得る。しかし、ＳＫ18の全形が分からないことに加え、性格を決定づけるような炉壁などの遺構が遺存していない為、詳細は不明である。またＳＫ12内には大量の鉄滓・焼土・炭が詰まっていたが、壁が焼けてないことから、前述した作業場から排出された廃棄物の捨て場であった可能性がある。②の遺構はＡ地区を特徴づけるものであるが、力量不足の為、可能性程度の記述に留まらざるを得なかった。

③のＳＤ03には、越中瀬戸の小皿・擂り鉢・茶碗といった食膳具・調理具が多く出土したことから、付近には住居が存在していたと考えられる。ＳＤ03の帰属時期は、前述のＳＫ12を切って形成されていることから、作業場段階と同時期もしくはそれより少し後と推測される。

ＳＥ01については、出土遺物より中世末～近世初頭に属すると考えられ、西側に走るＳＤ03が居住空間と作業空間を仕切る区画溝と考えた場合、位置的に作業場に付属するものと推定し得る。（片岡）

(2) B 地 区

古代

①土器廃棄場

中世半ば～近世初頭

②ＳＤ02、ＳＥ01

①は古代の集落が存在していた時期に旧地形である谷を土器廃棄場として利用していたと考えられる。

②のＳＤ02は、過去の調査（第１次～第４次調査）で確認された城館の区画溝と方向を合わせており、幅・深さも共にほぼ同規模であることから、関連性が窺える。出土遺物から14世紀頃には造られたと考えられる。溝は一時期自然堆積によって殆どが埋まったが、近世になってから再度掘削されたものと考えられる。（堀内）

2　遺　　物

須恵器は、7世紀後半～9世紀初頭に属し、主体は8世紀代のものである。県内の須恵器の編年において8世紀代の杯・杯蓋に見られる法量の小型化が認められる。

土師器は、煮炊き具については口縁部の形態と調整手法の特徴から、県内の土師器の編年のなかで8世紀代～9世紀初頭に比定できる。

輪羽口の年代は、1類は本遺跡の第4次調査区で古代包含層より出土した羽口と同じ形態と胎土である為、古代に属するものと考えられる。一方、2類はA地区で鍛冶・製鉄作業が行われた中世～近世初頭に属するものであろう。

中世土師器の年代は、1類は14世紀前半に、2類は16世紀後半に属するものと考えられる。

珠洲は、Ⅳ～Ⅴ期に比定でき14世紀代のものと考えられる。

越前は、Ⅴ期に比定でき16世紀代のものと考えられる。出土した蓋口壺は特殊品と考えられるものである。

越中瀬戸の年代は、17世紀前半である。小皿と擂り鉢といった器種が特に多く出土する。

石製品については、殆どが井戸の石組みに転用されたもので、半分に割った石臼等を井戸の石組みの基礎となる一段目を中心に組み込まれていた。こういった行為には、なんらかの宗教的意味合いも含まれていたのかもしれない。

3　友坂遺跡第7次調査区について

今回調査した地区の遺営年代は3時期に分けられる。

第1期　古代（7世紀後半～9世紀初頭）

B地区で、東側の谷状の落ち込み部が土器の廃棄場となっていた時期。これまでの調査で友坂遺跡北側には8世紀後半～9世紀初頭の竪穴住居跡が確認されており、土器等の他、鍛冶関連の遺物も確認されている。一方、西方の山麓にある友坂天神遺跡からは平成5年の試掘調査で7世紀後半～8世紀の遺物が出土している。地籍図から友坂遺跡と友坂天神遺跡の間には旧河道があったと考えられることから、B地区に土器を廃棄した集落は、旧河道右岸に形成された友坂遺跡が主で、遺跡東端を画する谷状の落ち込みに土器を廃棄したと推定される。出土遺物からこの集落が別の地域に移動した時期は9世紀初頭であると推定出来るが、移動先については不明確でこれからの検討課題である。

第2期　中世半ば（14世紀代）

B地区にSD02が造られた時期。過去の調査で北方に12～15世紀の城館が確認されており（第1次～第4次調査）、その南西にも13世紀代の木組み井戸や柱穴等の遺構が確認されている（第9次調査）ことから、一帯には城館存続期間にそれを取り巻くように形成された遺構が広範囲に広がっている可能性がある。

第3期　中世末～近世初頭（16世紀代～17世紀前半）

A地区に鍛冶もしくは小規模な製鉄関連の作業場が形成された時期。出土遺物等から、この時期周辺には居住空間もあったものと推定される。（片岡・堀内）

第23図　周辺の地籍図（1／12,500）
※富山県教育委員会1979に加筆

参 考 文 献

石川考古学研究会・北陸古代土器研究会1988『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』

越中瀬戸焼発祥400年記念顕彰会実行委員会1988『越中瀬戸発祥400年記念誌』

窪田蔵郎1983『製鉄遺跡』考古学ライブラリー15　ニュー・サイエンス社

財団法人富山県文化振興財団　埋蔵文化財調査事務所1996『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』

富山県教育委員会1979『婦中町安田城跡　魚津市佐伯遺跡』

富山県埋蔵文化財センター1991『富山県富山市南中田D遺跡発掘調査報告書』

富山県埋蔵文化財センター1994『富山県総合運動公園内遺跡発掘調査報告（4）　古倉B遺跡』

富山県埋蔵文化財センター1993『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』

富山大学人文学部考古学研究室1989『越中上末窯』富山大学考古学研究報告第3冊

婦中町教育委員会1984『富山県婦中町　友坂遺跡調査報告書』

婦中町教育委員会1993『富山県婦中町　友坂遺跡発掘調査報告Ⅱ』

婦中町教育委員会1995『富山県婦中町　中名Ⅱ遺跡発掘調査報告』

北陸古代手工業生産史研究会1989『北陸の古代手工業生産』

宮田進一1988「越中瀬戸の窯資料(1)」『大境』第12号　富山考古学会

宮田進一1992『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会

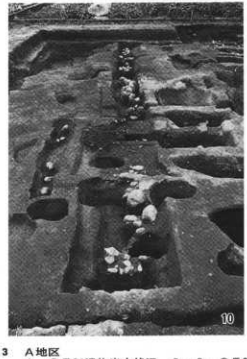
三輪茂雄1978『ものと人間の文化史　25　臼』(財)法政大学出版社

吉岡康暢1989『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館

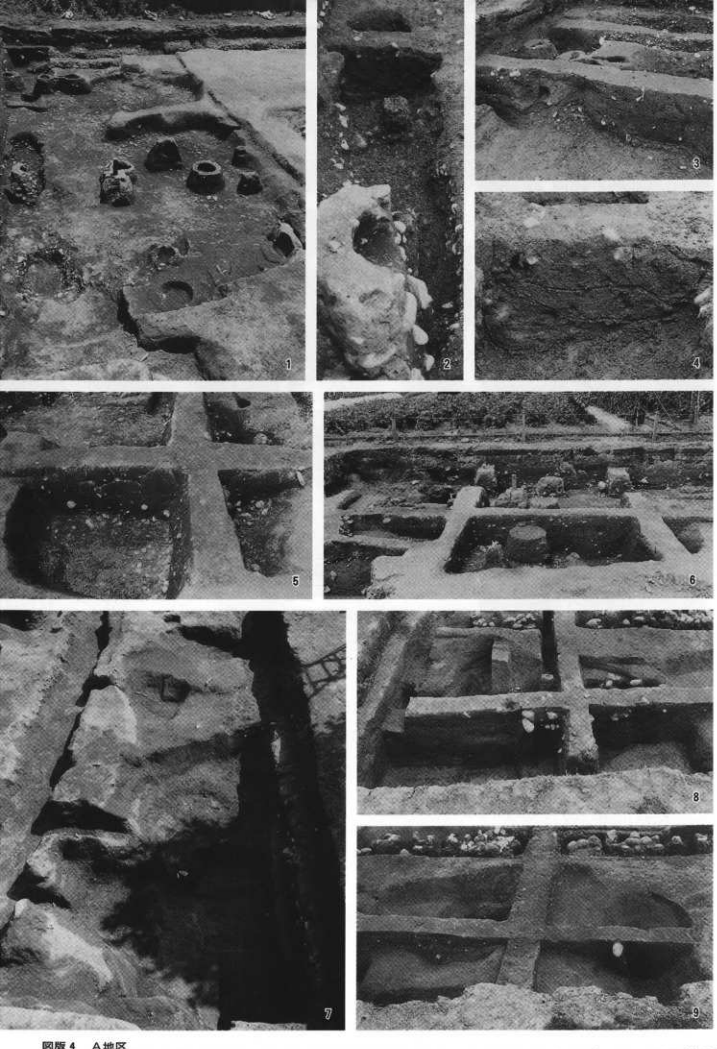
吉岡康暢1994『中世須恵器の研究』吉川弘文館

図版1　航空写真（1／10,000）　　国土地理院（昭和20年　米軍撮影）

図版2　A地区
1．全景（南から）　2．全景（北東から）　3．調査前の状況（南西から）　4．作業風景　5．SK17（西から）

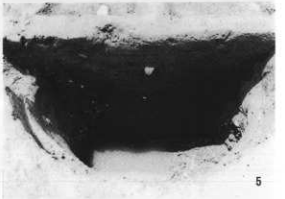


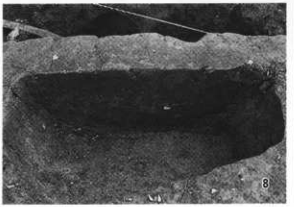
図版3　A地区
1．ＳＥ01遺物出土状況　2・3．ＳＥ01（南から）　4．ＳＤ02・ＳＫ13（北から）　5．ＳＤ02，ＳＫ12・13（南から）
6．ＳＤ02（南から）　7．ＳＤ01（南から）　8．ＳＫ12（南から）　9．ＳＫ12（北から）　10．ＳＤ03周辺（南から）
11．ＳＤ03，ＳＫ04・05（南から）　12．ＳＫ06（南から）　13．ＳＤ03（北から）



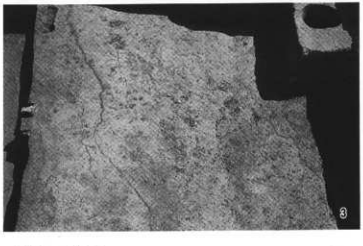
図版４　Ａ地区
１．ＳＫ14･15･18（西から）　２・４．ＳＫ18溝状遺構（西から）　３．ＳＫ15･18（西から）　５．ＳＫ15（南から）
６．ＳＫ14（南から）　７．ＳＫ09･10･11･16（北から）８．ＳＫ09･16（西から）　９．ＳＫ10･11（西から）

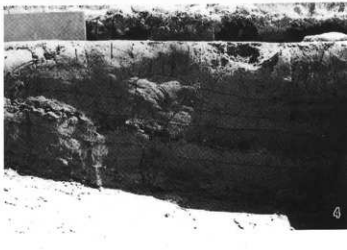
図版5　B地区
1．上層全景（東から）　2．下層全景（東から）



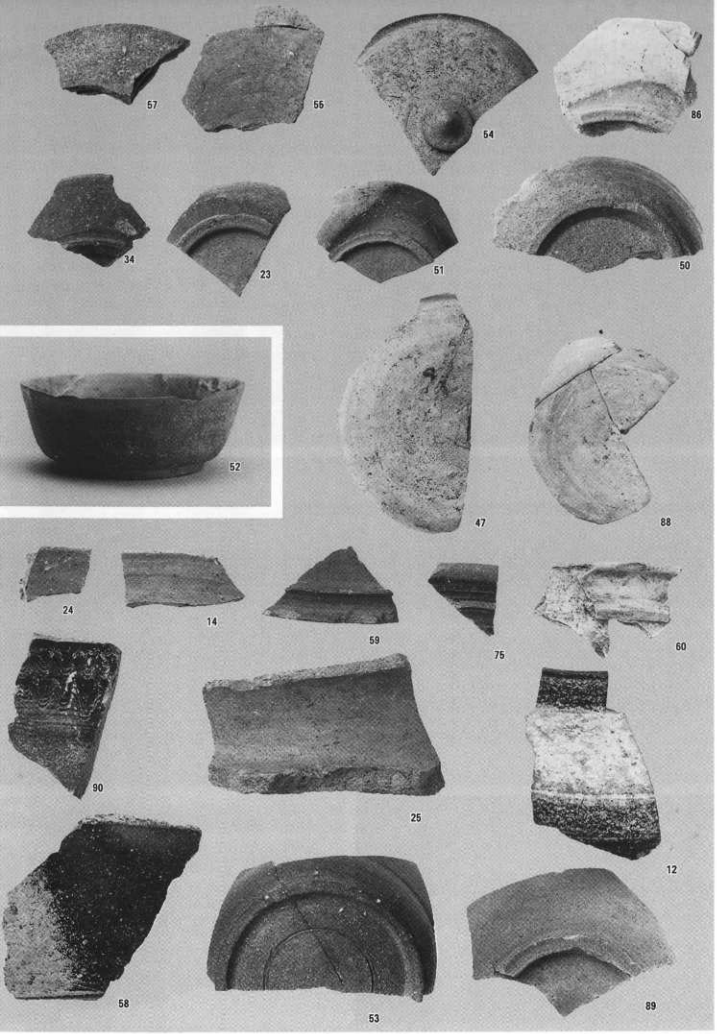


図版 6　B地区
1．ＳＤ02（南から）　2．ＳＤ02南セク（北から）　3．ＳＤ02北セク（南から）　4．ＳＥ01（北から）
5．ＳＥ01断面（北から）　6．ＳＸ01断面（北から）　7．ＳＤ01断面（南から）　8．ＳＫ01断面（北から）
9．作業風景（西から）

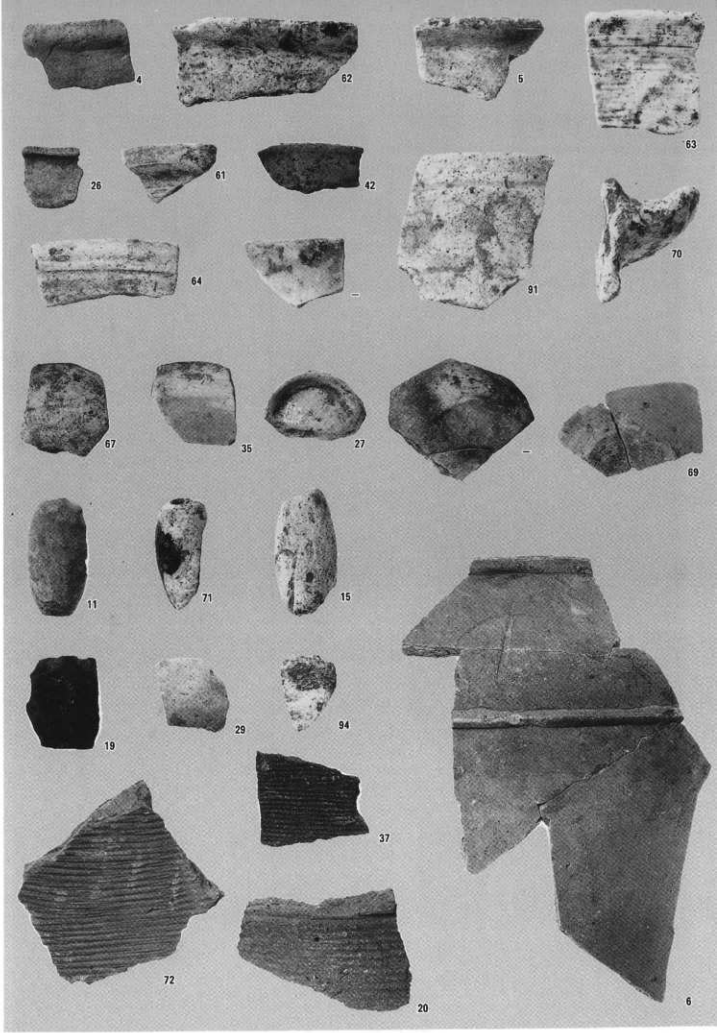




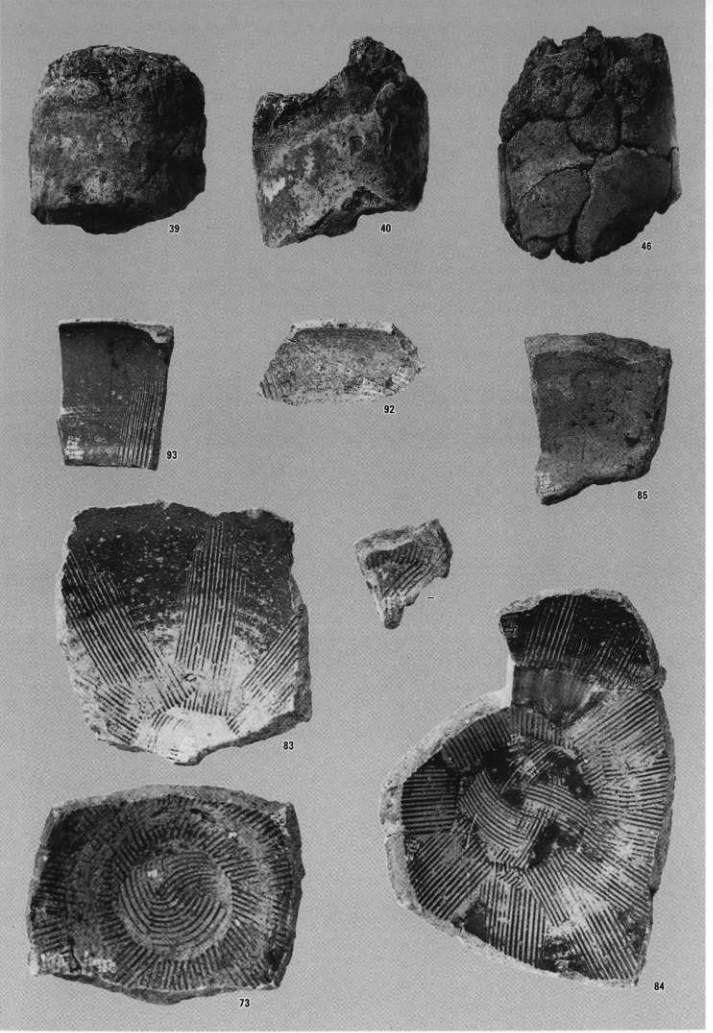
図版7　B地区
1．土器廃棄場（南から）　2．土器廃棄場（東から）　3．噴砂（南から）　4．噴砂断面（南から）



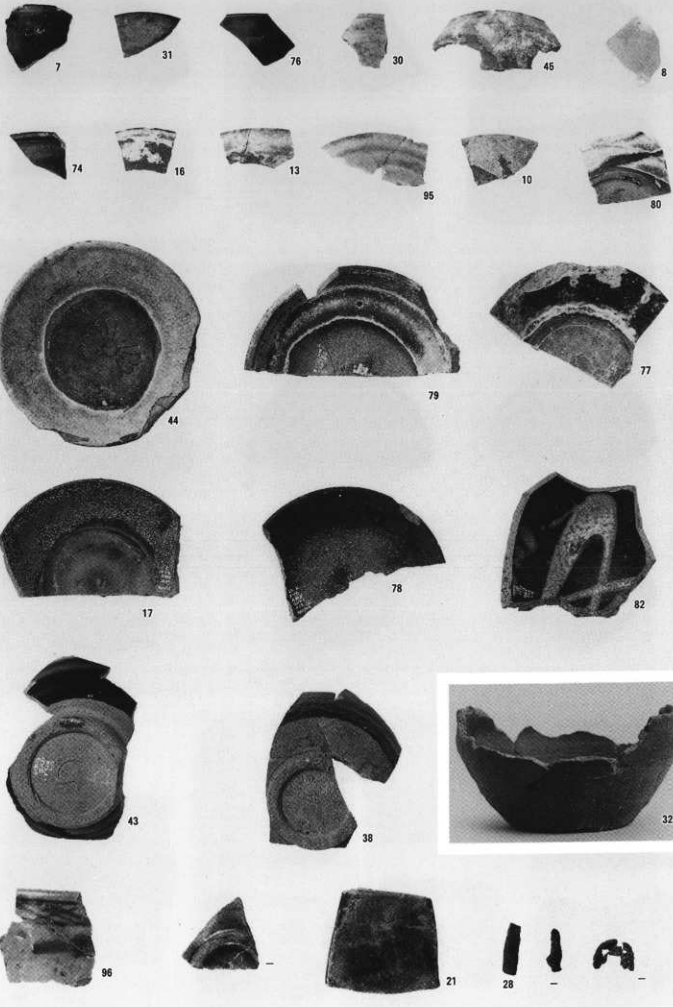
図版 8　A地区出土遺物（52は1／3，その他は1／2）※数字は実測番号



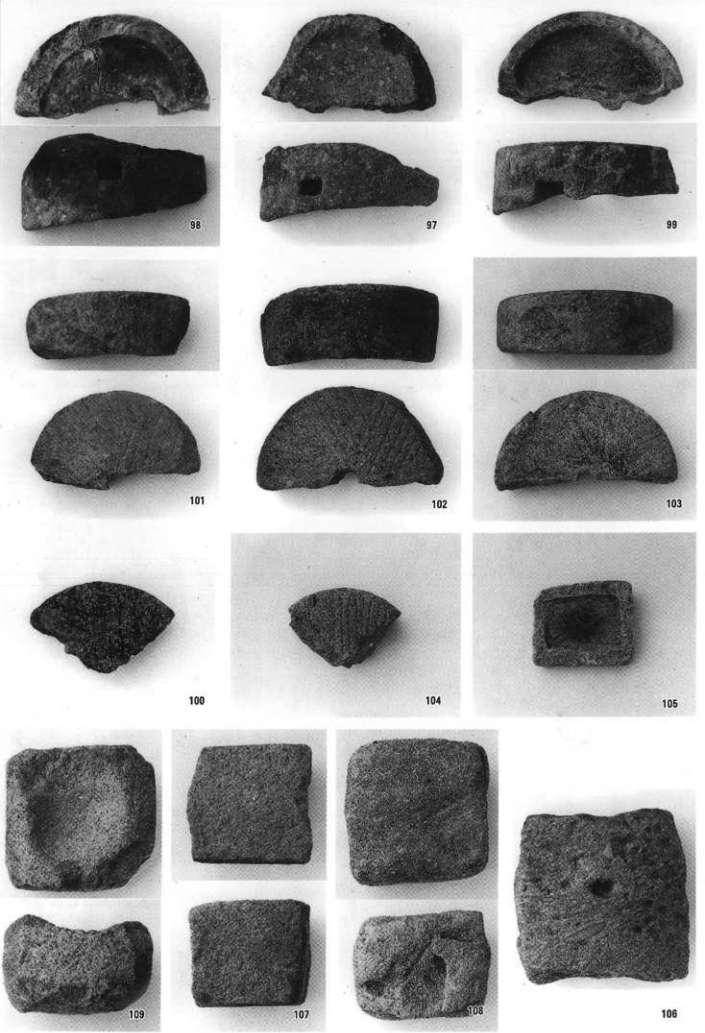
図版 9　A地区出土遺物（1／2）※数字は実測番号



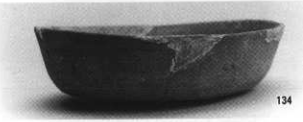
図版10　A地区出土遺物（1／2）※数字は実測番号



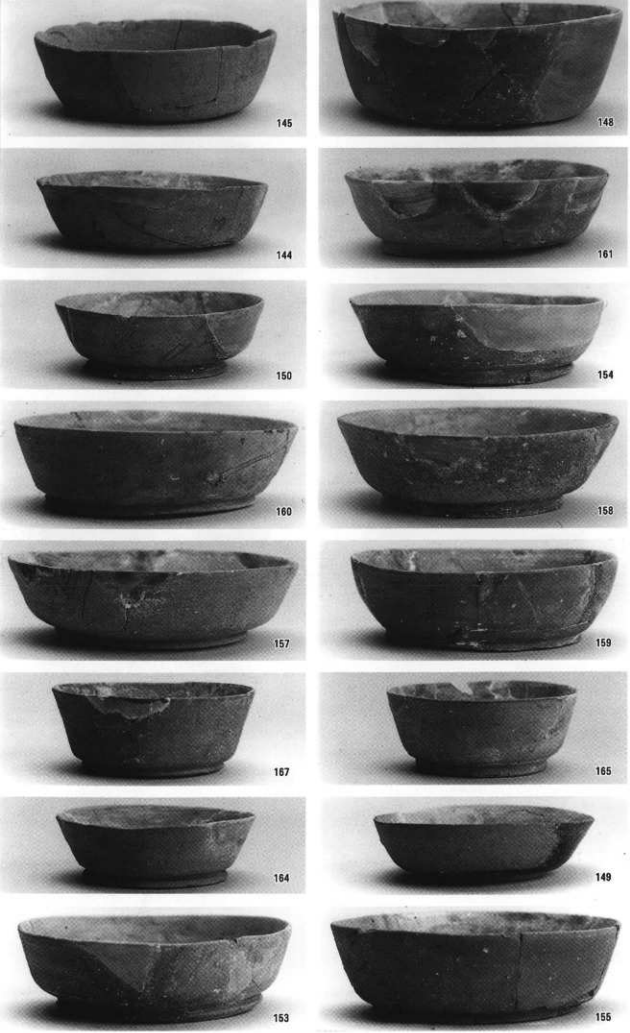
図版11　A地区出土遺物（32は1／3、その他は1／2）※数字は実測番号



図版12　A地区出土遺物（1／6）※数字は実測番号



図版13　B地区出土遺物（1／3）※数字は実測番号



図版14　B地区出土遺物（1／3）※数字は実測番号